

青年期における人生観再建に関する研究*

岡本 奎 六**

1958年10月15日受付

1. はじめに

一般的にいえば、こどもの人生観は理想主義的・童話的であり、必ずしも現実の事態にピッタリとマッチするものではない。そのことは思春期についても同様である。むしろ思春期の方が、その人生観はより理想主義的・空想的であるといえよう。この時代の人生観を示す、短期大学の一女学生が書いた作文の書き出しを次に示そう。

「私が看護婦になろうと考えだしたのは、多分中学1・2年のころであろう。そのころの私には、結婚はばからしく、何か不潔なもののように感じられた。それで私は、一生涯を独身で通し、病める人々、苦しむ人々のために尽そう。そうして、老後は养老院にでも入って、静かに余世を送ろうと考えた。そうすることがいかに美しく、また素晴らしいことのように思われた。」

男性に反撥したり、結婚を不純視したりするのは、思春期の心理である。この時代には、えてして独身の清純なる人生に憧れる。トラピストの修道女・独身の女医・看護婦——こうしたものへの憧れが思春期の女子にしばしばみられるのは、そのためであろう。

ところが、青年期にはこのような理想主義的、子どものような人生観をもつては、どうしても処理することができないような新しい経験が現れてくる。何となれば、青年期は子どもから大人への過渡期であり、生活空間が著しく拡大する。そのために、子どもころにはなかったような未知の体験が現れてくるからである。前述の作文に現れた看護婦志望の女子の場合は、そのような未知の経験が高校3年の時に現れている。それは家庭の状況から見て、看護婦になることが不適切であるという親の意見であり、反対論である。その点を彼女の作文の続きに当って見よう。

「大学に入るということは、田舎高校生の私には勉強が大変であるし、それに金もいる。それに卒業しても、今日は就職難の時代でもある。こういう考えも手伝って、

私は高校3年の時に看護婦学校の試験を受け、これに合格した。しかしそれは父母がどうしても許してくれなかった。結局は親の強い反対に負けてしまい、一年間は家業を手伝うことになってしまった。

失意のうちに、私がそこで接した社会はあまりにも欲得ずくめの社会であり、私の人生観とは相容れないものであった。」

このように、彼女は自分の理想主義的人生観をもつては考えられないような、“進路に対する親の反対”と、“欲得ずくめの社会”という二つの新しい経験に直面したのである。

青年期におけるこうした新しい経験を説明するためには人生観の再建が必要となってくる。青年期に人生観の再建を行うということは、いわば人間の発達過程における必然的要求なのである。この作文の女性においては、次の作文にみられるようにして、これらの経験を説明し得るような人生観の再建がなされる。

「こういう社会の中で生活するうちに、悲しむべきことではあるが、私の人生観はいつの間にか世間的な考え方と妥協していった。」女の人の幸福というもの、要するに大学に入って教養を高め、後は結婚してよい後継者を育てあげることだ”と、私は考えるようになった。正しいもの、美しいものに憧れ、これに一步でも近づこうと念じながらも、私はこのように考えるようになったのである。」

この作文に見られる新しい人生観は、理想が現実と調和しているというよりも、むしろ現実の力に理想が押し流されているように思われる。いずれにしても、新しい人生観はより現実的な基盤の上に再建された、適応的人生観であることが明らかである。

以上要するに青年期になると、①子どもころには経験しなかつたような新しい経験が次ぎ次ぎと現れてくる。②この新しい経験は、子どもころの人生観をもつては十分に説明しきれないので、③これを契機として、新しい人生観の再建が要請されるようになる。

この研究においては、①青年期には、人生観再建の契機となる、どのような新しい経験が現れるか、また②その経験を契機として、どのような人生観の再建がなされるかを明らかにしようとするものである。

* Some Studies in the Reconstruction of a View of Life in Adolescence

** Keiroku Okamoto (Prf. of Educational Psychology)

被験者は本学短期大学の家政科2年生および本学幼稚園教員養成所夜間部2年生である。両者ともに平均年齢は20歳ぐらいで青年後期の女子が主体である。

研究方法は作文法を用い、「私の人生観を変えた経験について」という題で、つぎの指示により、作文を書かせた。

「これから、「私の人生観を変えた経験について」という題で、作文を書いて下さい。青年期はその人に個有な人生観が作られる時期である、といわれています。その際に、何らかの特別な経験をして、それが契機となって人生について考えるようになり、その結果新しい人生観が再建されることがしばしばあります。若しも、あなたにそういう経験があつたなら、それは①“小・中・高の何年生ごろにあつた、どのような経験であり”、②“それにあつて人生観がどのように変つたか”はつきり書いて下さい。なおここでいう経験は、あなたが実際に行なつたり、見たり聞いたりした経験だけに限りません。そういう直接の経験の他に、読書のような間接的な体験でも、それが人生観再建のきっかけになつていさえすればよいのです。」

つぎのところでは、先ず人生観再建の契機となつた経験についての統計的研究を述べることにしよう。

2. 人生観再建の契機となつた経験の統計的研究

青年期になると、その生活空間の急激なる拡大に伴い、子どものころの人生観では説明しきれないような、未知の経験が次ぎ次ぎに現れる。そこでこの未知の経験がきっかけとなり、これを充分に説明し得るような人生観の再建がなされるのである。

人生観再建のきっかけとなる未知の経験は、本研究によれば表1のように9種に分れている。そして、各経験について、短大生・幼教生別に事例数を調べたのがこの表である。この表によると、たとえば家族関係に関する経験が人生観再建のきっかけとなつたとする事例は、短大生で5、幼教生は3、合計13事例となつていことがわかる。この表について説明する前に、先ず表の9種の経験それぞれについて、つぎにそのこまかい分類とその事例数(括弧の中)を掲げてみよう。

(1) 家族関係の経験

親の封建性・欠陥等を意識するようになったこと(4例)、自分が養女であることを知つたこと(2)、肉親の突然の死に見舞われたこと(3)、家族ないし自己の結婚により家族構成に変化を生じたこと(2)、家族と別れ、進学ないし就職のために上京したこと(2)、これらの経験

はいずれも家族関係の経験の事例である。それゆえ、家族の影響、ないし家族関係の変化が主たる原因となり、人生観の再建がなされた事例がこれである。

(2) 学校・友人関係

これに属する経験としては、大学の学生生活(3例)、尊敬する教師の転任(1)、友人の裏切り行為(3)、友人のすぐれた態度(3)、親友の死(2)、教師のすぐれた態度(1)、能力別学級編成に於ける利己主義(1)、などの事例が挙げられている。それゆえこの種の経験領域は、主として学校場面における経験である。

(3) 宗教的信仰

この種の経験としては、信仰を持つたこと(7)の他に(2)、宗教的な集りにおける対人的な影響・感化も含まれる。

(4) 自己の進路の突然の変更

この種の経験としては、受験の失敗による進路の突然の変更(4)、親の反対および家庭の経済状態の変化による進路の突然の変化(5)等の事例が挙げられる。

(5) 職場の経験

この種の経験としては、職場に見られる封建性・不合理性(3)、職場生活のマンネリズム(2)、職場と学校(夜学)の二重の負担などの事例を挙げることができる。したがつてこの種の経験は、職場経験のない短大生にはあり得ないわけである。

(表1) 人生観再建のきっかけとなつた経験の事例数

経験の種類	短大生	幼教生	合計
1. 家族関係	5例	8例	13例
2. 学校・友人関係	11〃	4〃	15〃
3. 宗教的信仰	3〃	6〃	9〃
4. 自己の進路の突然の変更	7〃	2〃	9〃
5. 職場の経験	0〃	6〃	6〃
6. 異性関係	1〃	3〃	4〃
7. 自己の病气	3〃	1〃	4〃
8. 読書の経験	1〃	2〃	3〃
9. その他	3〃	1〃	4〃
合計	34〃	33〃	67〃

(6) 異性関係

この種の経験としては、異性を交えたクラブ活動(1例)、初恋(2)、失恋(2)、などを挙げることができる。なお結婚も良夫との関係が中心になればこの種の経験に含めるのが適当であろうが、本研究に現れた事例は結婚後の嫁しゅうと関係や家族構成の変化が中心となつているので、これは(1)の家族関係に含ませてある。

(7) 読書の経験

これは伝記物、小説などの読書体験(7例)であり、したがって間接的な経験である。すなわち、作者の体験が作品の主人公を通して語られるが、これを読むことにより、作者の体験を追体験することになるのである。

(8) 自己の病氣

これは自己の病氣の事例(3例)であるが、若しもそういう事例があるとすれば、この他に身体的・生理的な特殊体験もここに含まれよう。

(9) その他

その他の経験は、警察官の暴言(1例)、孤児院訪問の経験(1)ちよつとした勇氣のある行動による成功体験(2)などの事例が含まれる。これらは(1)から(8)までのいずれの経験にも所属しない、雑多な経験である。

以上のように、経験領域は9種類に分類されているが、この分類は実際の・便宜的な立場から行つたもので、必ずしも論理的な分類ではない。

ここで表1の事例数をよくみると、短大生に多いのは2の学校・友人関係の経験であり(短大生の11例に対し、幼教生は4例)、逆に幼教生に多いのは職場の経験である。(短大生の0に対し、幼教生は6例となっている。)これは短大生の場合は過去10数年は専ら学校で生活しているのに対し、幼教生は現に職場にあり、職場生活が主であつて、学校生活は従となつている。そういう生活の主体の在り場所の相違を反映しているものであろう。この他に短大生に事例の多いものとしては、4の“自己の進路の突然の変更”があり、(短大生の7例に対し、幼教生は2例)、逆に幼教生に多いものには3の宗教的信仰がある。(短大生の3例に対し、幼教生は6例となっている。)4の自己の進路の突然の変更については、短大生には受験の失敗や、進学希望学部に対する当人と親の意見の相違などが含まれるが、幼教生にはこうした進路上の事例が含まれない。こういうわけで、この事例は短大生に多く、幼教生に少なくなつているのであろう。また宗教的信仰については、短大生の方は①比較的環境的に恵まれており、しかも、②家政科であつて熱烈な宗教的信仰を持つ必要性や動機にやや欠けている。他方幼教生は①“働きかつ学ぶ”ということで、環境的にやや恵まれず、②いずれも保母という比較的地味な人生航路をたどろうとする人々であるので、入信の動機も必要性もあるものが多いのであろう。なお全体としていえば、人生観再建のきっかけとなる経験として、家族関係、学校・友人関係、宗教的信仰、自己の進路の突然の変更・職場の経験等が多い。これらはいずれも青年の生活の重要な領域であることから、当然であるといえよう。また、異性関係・読書の経験、自己の病氣などの事例はやや少な

いが、これらの事例が挙げられているということは、やはり注目すべき事といえよう。

つぎに表1の経験について、その種類別にこれらの経験のなされた時期を調査したのが表2である。時期は中学時代・高校時代・大学時代と大まかに三分割してある。このうち中学時代は青年前期であるが、この中には小学校の事例が一つ含まれている。また大学時代は青年後期の意にここでは用いている。表2によると、全体としては中学時代は13事例があげられている。これに対して高校・大学はそれぞれ29、23事例となつており、中学時代よりはるかに多くなつている。これで見ると、青年期における人生観の再建の契機となる体験は、中学時代よりもむしろ、高校、大学時代になされる場合ははるかに多いことが推測されるのである。次に、経験の種類別にみるとどうなるであろうか。先ず各時期を通じて一様に多いものは、家族関係および学校・友人関係の経験である。これに対して、同じ対人関係でも、異性関係は事例が少なくてこの資料では何ともいえないが、大学時代になると恋愛・結婚などの問題が生ずるだけに、事例が多くなるのではなからうか。同じく事例が少なくて不明であるが、自己の病氣などは時期により差が少いと考えられる。中学時代に特に事例の多いような経験の種類はこの表では見当らない。高校と大学時代に多いものには、宗教的信仰がある。入信の必要性や宗教的関心の高まりなどから考えれば、この結果はうなづけよう。高校時代に多いものとしては、自己の進路の突然の変更がある。大学受験ないし就職という問題をひかえているだけに、高校時代はこの事例が多くなるのであろう。読書経験については、やはり高校時代に事例が多くなる傾向がみられそうである。自由読書を盛んにおこない、これから強い影響を受け、人生観再建に直接影響を受けるようになるのは高校時代であろう。

(表2) 人生観再建のきっかけとなつた経験のなされた時期

種類	時期			合計
	中学時代	高校時代	大学時代	
1. 家族関係	4	6	3	13
2. 学校・友人関係	3	6	6	15
3. 宗教的信仰	0	4	5	9
4. 自己の進路の突然の変更	1	8	0	9
5. 職場の経験	0	0	6	6
6. 異性関係	1	1	0	4
7. 読書経験	1	2	1	4
8. 自己の病氣	1	1	1	3
9. その他	2	1	1	4
	13	30	24	67

3. 人生観再建の契機となつた事例の

具体的内容

青年期における人生観の再建に対して、そのきっかけを与える経験にはいかなるものがあり、それはいつごろなされる、どのような経験であるかについて触れて来た。ここで作文の一節をそのまま抜萃して、各経験の具体例を示すことにしよう。

(1) 家族関係の経験の例

事例 1) 姉の死に直面して

「私が中学1年生の1月のことである。姉は18歳という若さでこの世を去つた。花にたとえるならば、つばみがふくらみ、一ひら二ひらと咲き始めようとする時期とでもいえようか。この日の姉は医者から睡眠薬を吞まされて、夢現の状態でしきりと母を困らせていた。

“ねえ母さん、小学校の歌を唱つて。

ねえ、背中に小鳥のつばさをつけて。

おにぎり持つて来て食べさせて……”

死際になつて姉はすっかり童心にかへつたのであろうか。つばさをつけてといつたのは、空をかけめぐつてやがて昇天する自分のことを考えていたのであろう。おにぎり云々は、食べさえすれば治ると常日頃医者にいわれていたのを思いだし、生き度い一心からいつたものであろう。最後まで生への執着を見せて本当にかわいそうであつた。だが私の呼び声が聞えたのか、姉はにこつと笑つて死んでいつた。

始めて肉親の死を体験した私は、神への憤りと無感情とをひしひしと感じた。何が故に、神は罪もなき優しい靈魂を召し賜うのか。(以下略)

事例 2) 養女であることを知つて

「私の小学校時代は、戦争の為疎開し、田舎で母との二人暮らしであつた。父は出征していなかつたのである。だから何ごとも母なしにはいられないという状況であつた。学校へ行くことは喜びではあつたが、同時に恐くもあつた。空襲警報のサイレンがなつて学校から帰された時に母がいないと、サイレンの音に一人おびえながら恐怖に泣いたものである。小学校も6年になると父も帰り、私は何不自由のない楽しい家庭生活を迎えることができた。だがこの平和な楽しい家庭は永くは続かなかつた。この年が私には忘れることのできない悲しい年の始まりとなつたのである。それはお友だちから、私は養女であることを知らされたことである。今の今までかたく信じ、頼り切つていた親が、私を愛しかわいがつてくれる親が、私の真の実父母ではないとは……。

そんな事は絶対ないと、私はお友だちの前で強く否

定し続けた。だがよく考えらみれば、私は両親のどちらにも似ていないのだ。

それからの私は母の顔をじつとみつめて母を薄気味悪がらせた。そして次第に無口な子になつていつた。自分が何か不潔に感じられると共に、母が憎らしく感じられたからである。

家で無口になつた反面、学校では私は人一倍さわがしい子になつた。自分だけが、他の人とはちがうという事が、私にはくやしかつたからである。(以下省略)

(2) 学校・友人関係の経験の例

事例 3) 尊敬する教師の転任

「人生論を折り交ぜて授業をして下さる国語の先生、ある日、読書日記の片隅に書いて下さつた

“観念より、行為で行こうよ”と。

よく考えても、それが現実の場面と結び付かない、そういう私にやさしく教えて下さつたのだ。

私たちが高校3年になる時に、先生は突然転任されることになつた。

私たちが泣いてお引き止めた夜に、あまりにも強引な私たちに先生はおつしやつた、

“誰でも、自分が一番かわいいのだよ”と

その時に、元來依存性の多分に強い私も、

“やはり独力で生きなければいけない”と考へた。

“実践的行動の上に生活を基こう”と痛感した。」

事例 4) 友人の不信行為

「それは高校2年の時のことでありました。私と特に仲のよかつたAさんが突然退学してしまつたのです。Aさんは私のよき相談相手であり、いつも人生や社会や、その他の問題について語り合う相手でした。私が無口でどちらかという人好きがよくないのに対して、Aさんは活動的であり、いつもなごやかな空気をただよわせておりました。そのAさんが一言も私に相談せず、全く突然に退学してしまつたのです。後1年有余で卒業という時に、親友の私に何も告げず、何の相談もせず中退するという事は、私の存在が彼女には何の役にも立たないということなのでしょうか。今まですべてを打ちあけ語り合う親友として堅く信じていただけに、私は彼女に対してだけでなく自己および他人に対する信頼を失つてしまいました。(以下略)

(3) 宗教的信仰の経験

事例 5) キリスト教信仰にめぐめて

「これといつた病気はないが、どことなく体の具合が悪かつた私は、高校を卒業してから家でぶらぶらしていた。そんな時に、近所のお友だちに教会にさそわれ、好奇心と暇つぶしぐらいの気持で一度教会に行つた。私の

家は禅宗で、先祖の一人が寺を継いでいるという家庭で、キリスト教には全く縁がなかった。だから初めて礼拝堂に入った時は、何となくくすぐつたい様にさえ感じた。今その説教を思い出してみても、内容はさつぱり頭に浮んでこないほどである。

それにもかかわらず、私はその場の人々の暖い態度を滲々と味つた。突然他から入ってきた私を、ほんとうのきょうだいのように暖く迎えてくれたからである。

心のすさんでいた私は、こうした暖い人々の態度と、その場の雰囲気につつかり心のやわらぎをおぼえた。キリスト教の教理も信条も何もわからないのに、私は隣人愛にみちたこのグループからぬけられなくなってしまうた。

やがてクリスマスという12月の中ごろに、キリストについては何もわからないが私は洗礼を受けるまでになつてしまった。親のいう事は一も二もなく賛成する私が、初めて両親に反対し自分の決心に従つたのはこの時である。両親は、普通の人が休む日曜日に教会に行くことは、結婚してから困るといつて反対したのである。(以下略)

(4) 自己の進路の突然の変更

(この事例としては最初に看護婦志望を親の反対で変更した事例が載せてあるので省略する)

(5) 職場の経験

事例 6) 職場生活の矛盾を体験して

「高校を卒業し、希望に胸をふくらませて就職した私が、先ず痛感したのは社会の矛盾ということでした。七人兄弟の末つ子の私は、家にあつては一番小さい子という、ただそれだけの理由で、何も用事をさせられず、甘やかされて育ちました。ところが職場の生活はこれと全く逆で、最年少の私が、いつも他の人のお茶汲当番をさせられました。何事も経験と考えてがまんをしましたがつらい経験でありました。

現在の職場は経理事務ですが、納税者のよき味方となろうとして一心に行つてきました。しかし税務も、いろいろと裏面のからくりを知るにつれて、一体こんな事が堂々と行なわれてよいのかと疑問になつてまいりました。「誠実」を生活信条としている私にとつては、このような職場の経験はあまりにも大きなショックであります。(以下後略)

(6) 異性関係の経験

事例 7) 初恋

「善太は私より二つ年上で、両親がなく祖母と二人きりだつた。小さい時から、私はそういう善太がかわいそうだと思つた。だからいつも善太と遊ぶようにしていた。

私が中学二年のとき、善太は町の高校に入学した。そのころから、私の善太に対する感情は、同情から淡い恋に変つていつたようである。

高校生になつた善太はだんだん不良になつて、町の人々から嫌われるようになった。だが私は善太がますます好きになつていつた。私が高校に入るようになると、善太と同じ汽車で通学するようになった。だがどうした事か、私は善太に近付けなかつた。善太も一言もいわなかつた。

私が高校2年になると「善太は町から姿をくらませてしまった。親がいないということが善太の心をすさませ、不良化し、そして放浪者にしてしまつたのである。

こうした体験がきっかけとなつて、それからの私は不良といわれる青年を見るたびに、慰めてやり度いような、同情したいような気持ちでいつぱいになる。高校3年の時、私は少年院で働こうと決心した。そして仙台の東化少年院の院長さんと、文通するようになった。(以下略)

(7) 読書の経験

事例 8) トルストイの作品、その他の読書

「高等学校2年のころ、私は友人に贈られた「クロイツェル・ソナタ」を読んだ。これはトルストイの作品としてはそれほど高く評価されていないが、当時の私には大きな影響を及ぼした。それは、この本を読んでからは私の読書傾向が変り、哲学的・思索的なものを好むようになったからである。中でもゲーテの「若きベルテルの悩み」のようなロマンチックな思索ではなく、その「みにくさ」をも本来の姿・本質とする人間性を探究する思索を好むようになった。そして土田杏村の「思想読本」川上貫一の「資本論読本」を手初めに、主として唯物論的傾向の読書を行つた。こうした期間が約2カ年ほど続いた。この期間が私の人生観を変える時期でもあつたのである。(以下略)

(8) 病気の経験

事例 9) 病床に臥して

「終戦直後の混乱期に女学校を卒業した私は、20歳の春に初めて生れ故郷を後に上京した。そして小児科医のお宅に住込みのお手伝いとなつたのである。お嫁に行く前に、他家に行つて行儀見習をしたり、家を離れて生活する経験をさせたいという親の考えと、実社会に出てみたいという私の考えとが一致して、こういうことになつたのである。

私の新しい生活は幸福であり、希望があつた。おばあさんには、毎晩信仰のことについてよいお話を聞かせていただくことができた。今まで自分の考えや意見を他人に話すことは気の小さい私にとつてはつらいことであつ

たが、だんだんと恐れず何でも話せるようになって来た。

そんなある日、私は突然大病にかかり、入院して手術をした。思いもよらない大病で引き続き入院していたが、その時いろいろと人生について考える機会を得た。ある時は生きる望みも失い、死を考えるようになった。親に甘えて育ち、他人ばかり頼りにして育った自分が、何かあわれな存在のように思えて来たからである。(以下省略)

(9) その他の経験

事例 10) 通勤途上で

それは通勤途上の電車の中のでき事であつた。H駅に電車がついた時、座席に作業帽を忘れたまま、私の隣席にいた労働者が降りてしまった。気がついた私はすぐに立ち上つてみたが間に合わなかった。“仕方がない、仕方がない”と心の中でつぶやいているうちに、その座席は後から入つて来た二人連れにふさがれてしまった。二人連れはこの帽子を見ていつた。

“何だ帽子があるじゃないか。大した代物じゃないがもらつとけよ”

この言葉を耳にした私は、何かドキンとした。“他人に罪を犯させてはならない”“正しい事には勇気をもって”“いやいや。作業帽ぐらいどうでもよい……”と思ひまどつているうちにY駅が来た。私は立上りざまに、

“その帽子はH駅で降りた人のです。私が駅にとどけます”といつて、帽子を受取ると、後も見ずにとび降りた。ホームで駅員に帽子を渡した後も、私は頭がガンガンして、ほほはほてつた。会社につくまで一人で興奮していた。

こんなことは他の人には何でもない、つまらない出来事として眼に映じたであろう。だが私にとっては、大きな出来事であつた。勇気を出すことができたということは、私に大きな自信を与えた。“正しいことはどこまでもやり抜こう、私にもそれが出来るのだ”という確信が得られた。その日は一日愉快であつた。

それ以来、私は正しくないことには耳をかさないようになった。少し融通の利かない人間として通るようになったが、私には一つの信念ができた。心の弱くなつた時には、いつもあの日の出来事を思い浮べて我とわが身をはげましている。」

以上は人生観再建のきっかけとなつた典型的な事例を作文の抜萃によつて示したものである。

4. 青年期におけるニヒリズムと適応的

人生観

青年期には、子どもの人生観をもつてしては説明し得

ないような、多くの未知の経験に遭遇する。これらの経験は多かれ少なかれ青年にショックを与え、これがきっかけとなつて、青年に人生探究の関心をおこさせる。

ところで、ある種の経験はその刺戟価があまりにも強烈であり、かつまた青年が解明しようとしている人生はあまりにも複雑な構造をもっている。そこで青年はしばしば烈しいフラストレーション (Frustration. 要求疎止と訳す人もいる) に陥ることがある。青年期に特徴的なニヒリズムの人生観は、こうしたフラストレーションにより起るものである。ニヒリズムの人生観にとりつかれると、破壊作用が行われることがある。この破壊作用が自己の内部に向けられると、自己無能観、自己嫌悪、では自殺などの形態をとる。またこの破壊作用が外部の社会に向けられると、他人への憎しみ・反抗現象・暴力行為・犯罪等の形態をとるようになる。そのことは、すでに述べたいくつかの事例に(最初の看護婦志望の事例、事例 2, 事例 4, 事例 5 および事例 8) はつきり現れているが、さらに母が義母であることを知つたつぎの事例の傍点部に明らかに現れている。

「思えば中学 2 年までの私は幸福であつた。人生に、幸以外のことばを知らなかつた。その私が大きなショックを受けたのは、中学 2 年の時であり、それは私の母が義母であり、生みの親ではないということを知つたことである。このショックはあまりにも大きく、急に人生とは暗いもの・苦しいもの・わからないものとして、私の胸を圧してしまつた。三日後には、私は自殺をしようと考へ、いろいろ工夫したが、結局死ぬまでの勇気はなかつた。このことがあつてからの私は、家庭に反感と不信をいだき、一瞬たりとも幸福感を感じることなく今日に至つている。私の考え方は偏窟になり、すべてのことに消局的になつていつた。高校時代は哲学班に入り、死について考へつづけた。だが現在でもこの暗い人生に別れをつける勇気はない。

ある人は“死ぬことはすべての負けである”という。しかし私はそうは思わない。若しも死ぬことが負けることならば、生きることは勝つことにならう。しかしこの暗い人生に別れられないことが、どうして勝つことなのだろうか。

私は戦わねばならないと思う。しかし今の私には、もはや戦う力は尽きてしまつたという感じがする。」

以上の例では、ニヒルな人生観から自己内部および外部社会に対する破壊作用が現れている。このように破壊作用が明確には現れていなくとも、明らかにニヒリズムの人生観を持つていると考えられる事例は、前述の新しい未知の経験の直後にはかなり多く現れる。そして後に

はニヒリズムの人生観は次第に減少し、青年後期には極めて少なくなる。そのことは、表に示されている。表の中の括弧の外の数値はニヒルな人生観を持っていると判定される事例であり、括弧の中は適応的の人生観をもつと判定される事例数である。先ず家族関係、学校・友人関係などそれぞれの特殊経験（前述した人生観再建の契機となつた）をした直後の数日ないし数カ月では、ニヒルな人生観は全部で28例であるのに対して、そうでない適応的の人生観は39例となつている。これに対して、これらの経験をしてから数カ月ないし数年を経た、短大2年の2学期ないし幼教2年の2学期現在では、ニヒルな人生観はわずか8例しかみられないのに、適応的の人生観は59例にも増大している。これを%でしめすならば、ニヒルな人生観は42%から12%に減少しているが適応的の人生観は58から88%と著しく増大している。ところで、短大および幼教2年は明らかに青年後期である。青年後期は一般に理想主義的な人生観が現実と妥協ないしは調和する適応的の人生観の時期といわれているが、この結果は正にその通りである。

(表3) 青年期におけるニヒルな人生観と適応的
人生観

経験の種類	経験直後のニヒルな人生観	現在のニヒルな人生観と(適応的の人生観)
1. 家族関係	8例(5例)	3例(10例)
2. 学校・友人関係	9“(6”)	2“(13”)
3. 宗教的信仰	0“(9”)	0“(9”)
4. 進路の急変	4“(5”)	2“(7”)
5. 職場経験	4“(2”)	1“(5”)
6. 異性関係	1“(3”)	0“(4”)
7. 読書経験	0“(4”)	0“(4”)
8. 自己の病氣	2“(1”)	0“(3”)
9. その他	0“(4”)	0“(4”)
合計	28“(39”)	8“(59”)

つぎに表3について、経験の種類別にニヒルな人生観と適応的の人生観を調べてみよう。先ず経験の直後にニヒルな人生観が比較的多く見られるのは、家族関係、学校・友人関係、進学および就職に関する進路の急変、および職場経験である。このうち、職場経験以外の三種の経験の事例については、青年後期の現在においてもなおニヒルな人生観のものがかなりいることがわかる。これは、これらの特殊経験の刺戟値は著しく高く、それだけに与えるショックも大きく、かつ深刻な事例が多いということであろう。なお宗教的信仰については、ニヒルな人生観は一例もみられない。その原因は、ここにあげられた宗教的信仰の事例は、他の原因によつて悩んでいたものが、宗教的な入信によつて安定感をとり戻す事例だけであるからであろう。もしも一度いだいていた宗教信仰にいちぢるしい疑惑と不信をいだき始めたという事例があげられているとするならば、それに伴う人生観は少くとも一度ははつきりとニヒルな傾向を示すであろう。それから、以上の4種の残りの5種の経験に関しては、いずれもニヒルな人生観の事例が僅少か無いかのいずれかである。しかしこれらの事例は、その事例数全体が少ないので、統計的には全く無意味な数値にすぎない。

参考文献

- 柱 広介：青年心理学，1950年（金子書房）
本書第七章には青年期における人生観形成のメカニズムが述べてある。
- 岡本重雄：「人生観の確立」：青年心理学講座第巻
1955年（金子書房）
本書には、青年期におけるニヒリズムの人生観について氏の考え方の他に、後藤金十郎氏の説が掲載されている。

岡本奎六 本学専任教授 教育心理学専攻